

『Operation Snow』『スノウ作戦』：ホワイトハウスに入り込んだソ連のスパイは  
どのようにしてパールハーバーを引き起こさせたか

ジョン・コスター著

Regnery Publishing, 2012

書評： Tadashi Hama

一九四一年に日本は真珠湾を奇襲したが、実はフランクリン・ルーズベルト政権は日本軍の奇襲について、多くの警告を受けていたという事実を明確に証明する作品がたくさん書かれている。(トーランド 1982/バーンズ 1972) そればかりでなく、こういう作品を読むと、政権はパールハーバーの米軍に、情報を伝えることを故意に怠り、その結果、二千人以上の死者を出したということがよく分かる。また、ルーズベルトは親英派であり、米国人の生命を犠牲にしても、颯爽と白馬に乗って、英国をドイツの魔手から救うためにヨーロッパ戦線に参加することを選んだということを示唆する人々も沢山いる。

パールハーバーの奇襲に至るまで、ルーズベルト政権は、米國中立法を愚弄して、秘密裡に軍事援助を英国へ送っていた。ルーズベルト政権はまた、大西洋の米軍に、ドイツを挑発するようにと指令を出していた。「ドイツが襲撃」してくれば、ヨーロッパでのもう一つの戦争に参加することをアメリカ国民が支持してくれるようになると期待していたのである。(ブキャナン 2008) ドイツは、米国との戦争を望んでいなかったのも、餌に飛びついては来なかった。さらには、ドイツは、ソ連との戦争に専念するために、英国との停戦を模索していた。そこで米国の挑発には乗らなかったのである。

パールハーバー奇襲前の情勢を勘案しても、なぜルーズベルト政権が、アジアを迂回してヨーロッパでの戦争に介入することを選んだのかは理解するのは難しい。実は、ルーズベルト政権はアジアでの現状維持に少なからぬ関心を持っていた。つまり、ヨーロッパの植民地の領土保全を図り、日本の「侵略」を阻止しようとしていた。そのための手段として、中立法を無視して、中国国民党に武器援助をし、さらに経済制裁を発動した。しかし、当時の政権が必死に求めていたのは、ドイツとの戦争であり、日本との戦争ではなかった。本書『スノウ作戦』は、パールハーバー奇襲は、ソ連という第三者が作り出したものだという説を提出している。

歴史家ジョン・コスターの説は従来のパールハーバー関係の文献の流れからは甚だしく逸脱している。本書は、二つの点で魅力的である。一つは、ソ連の役割および日米間の戦争の誘因を作った人物について詳細な解説を加えているという点であるが、もう一つは、この陰鬱な時代の重要人物と出来事について生き生きとした描写をしているという点である。

コスターは、高校やハリウッド映画で学んだ歴史を大胆に切り捨てている。それは、特にパールハーバーについての、「公式のバージョン」「公式の歴史」「黒と白・善玉と悪玉」の歴史であり、また、日米戦争全般についての歴史である。

コスターはさらに進んで、ジョン・トーランドやハリー・エルマー・バーンズのような従来とは違う説を唱える人たちをも切り捨てている。前者は、著書『真珠湾攻撃』(1982) (邦訳「真珠湾攻撃」徳岡孝夫訳、文藝春秋社) で FDR が日本のパールハーバー奇襲を使嗾して、それを許すに至った経緯を示し、後者は著書「*Pearl Harbor after a Quarter of a Century*, 1972」で、FDR が、「故意にパールハーバー奇襲を計画した」ことを証明したばかりでなく、さらに、その後には、FDR の親中国 (および狂気なほどに反日本) の感情があったと仄めかしている。

コスターは、政策作成や意思決定に於て、個人的な考え方があまり影響力を持つとは考えていないが、頭から無視するのも問題があるのではなかろうか。実際、FDR 政権のメンバーの相当数が親中派だった。それは一つには、「チャイナ・ロビー」の効果的なプロパガンダ・キャンペーンのおかげだった。チャイナ・ロビーとは、西欧で教育を受けた中国人、キリスト教組織、米国メディア (Bradly, 2015) などの集合体である。少なからぬ政府高官も、チャイナロビーに影響されて、あるいは FDR がそうだったように、若い頃に吹き込まれた中国へのセンチメンタルな愛着に揺さぶられて、チャイナ・ロビーのメンバーになっていた。チャイナ・ロビーの唯一の目的は、「中国の西欧寄りのキリスト教擁護者」である蒋介石の国民党に米国の援助を届けることであった。(米国は結局、腐敗した国民党政府に、現金と武器で何百万ドルをも気前よく与えたが、それにも関わらず、国民党は在中日本軍を撃破することも、また、中国共産党の勝利を阻止することもできなかった) 同時に、米国の政権は、FDR に象徴されるように、感情に於て、圧倒的に反日だった。FDR は、米国に居住する日本人が同化することができるようになるとは信じていなかった。そして、日本人は白人よりも中国人よりも下位に位置する劣等な人種だと信じていた。本書によれば、「極東の情勢」については国務省の中にも右に出る者のいない専門家であるスタンリー・K・ホーンベックは、国務長官コーデル・ハルの四人の特別補佐官の一人だったが、彼は、「不合理」かつ「熱烈な」反日であり、また、「東洋人は臆病で、脅迫とテクノロジーによって簡単に屈服させられる」と信じていたとのこと。本書はまた、ホーンベックの上司であるハルが、日本人を高く評価せず、来栖三郎特使と野村吉三郎大使を「ならず者とくそったれ」と呼んでいたことを教えてくれる。個人の性向がどの程度まで公式な政策形成と意思決定に影響を及ぼすかを数量的に判断することは難しいが、政策決定権を持つ者たちが、公的な仕事をしている時に、自分の個人的な感情を殺すことがあろうとは思われない。

コスターがこのような考えを持つに至った土台となるものは、一九九六年に KGB の退役陸軍中將ヴィタリー・パブロフが発表した回想録だった。このパブロフという人は、一九四一年には、米国での諜報活動をしていた NKVD (内務人民委員部) の第二位の地位にあった。本書は、一九四一年、パブロフと、米財務省の高官ハリー・デクスター・ホワイトの運命的な出会いから始まる。片や米国行政府ナンバーワンの日本専門家であり、片やソ連のエージェントである。

当時、ソ連は、ドイツが西部国境に攻撃を仕掛けて来た場合、アジアに於ける反共のライバルである日本が、東部から侵攻して来ることを恐れ、それを防ぐ方策を模索していた。本書の述べる所によると、ソ連のスパイたちの集めた情報から、英独の間に中立条約が締結される可能性があり、その場合、ドイツは直ちにソ連に侵入する可能性が強いということが示唆された。ソ連は一九三九年にドイツと不可侵条約を結び、一九四一年には日本と中立条約を結んでいたが、東西両面作戦を余儀なくされるかも知れないと懸念していた。そういうわけで、日本軍をソ連国境から引き離しておくために、ソ連の諜報機関は日米戦争を画策したのである。米財務長官ヘンリー・モーゲンソーの片腕とも言われたホワイトは、ソ連の工作に操られて、「日米戦争をそそのかせる」ことになった。

一九四一年の夏、ホワイトおよびその傀儡だったモーゲンソーは、国務省の反日派と協力して、指導力を発揮し、その結果、米国は、日本の多数の平和交渉の提案を意図的に斥けたのだった。日本が米国に奇襲攻撃を掛ける予測が高まっていたが、それでもまだ、戦争が避けられない事態には立ち至っていなかった。

そこで、ホワイトは二つのメモを作った。一通は、「モーゲンソーの署名を得てFDRに達することになっていた。もう一通は、ハルに届けられた。いずれも、その内容は、「日本に無理難題を吹っかけるものであり、日本がこれを受諾したら、革命が起ることが予想されるほどのものだった」。ホーンベックは、これをもとに、ハルノートと呼ばれることになる文書の起草にかかわった。これば、米国の最後通牒となり、ハルはこのノートを一九四一年十一月二十六日に日本に提示した。コスターの言によると、このハルノート——ホワイトの二通のメモに基づいていた——は、日本に関する限りは、宣戦布告そのものであった。覚えておかなければならないことは、ホワイトは拙速に駆られてこんな要求を持ち出したのではないということである。絶対に日本が受け入れられないような要求を故意に仕立て上げたのだった。そればかりではなく、ホワイトはそもその始めからこのような要求を出すことを考えていて、パブロフとの会談が終わった直後にメモを作っていたのだった。この時のメモに出て来る要求は、若干の修正はあるものの、ハルノートの中にも出て来る。その中には、日本の中国からの撤兵、満州からの撤兵、戦争物資の処分などが含まれていた。日本の提案に対する米国の解答は一貫して理不尽なものだったので、日本は万一に備えて、準備をしていた。奇襲の最終的な決断は十二月一日になされた。御前会議で開戦と決まったのである。「ハリー・デクスター・ホワイトが我々に真珠湾を与えた」。ソ連は第二次世界大戦を乗り越えて生き残った。——そして、ホワイトは引き続き、一九四八年に世を去るまで、ソ連のスパイを続けた。なんと、旧ソ連はホワイトを英雄扱いしていたのである。

コスターは、ホワイトがいかに易々に、また効率的に外交政策に影響を与えたかを示している。ホワイトの上司モーゲンソーは財務長官として財務省を牛耳っていたが、また、FDRの「旧知の」かつ「親密な」友人だった。モーゲン

ソーはまた、外交政策に関して、しばしば FDR に助言を与えていたので、「第二の國務長官」とも呼ばれていた。FDR はハル國務長官を冷遇していた。FDR 自身、ハルを國務長官にしたのは、「南部の保守的な民主党支持者を宥めるための妥協策」と考えていた。当然、ハルは FDR のこのような扱いを憤っていた。反日親中の官僚が政府の重要ポストを占めていた。たとえば、ホーンベックはちょっと威嚇してやれば、日本は米国の要求に屈するだろうと信じていた。ということは、反日政策を立案するのは手易いということだった。財務省が國務省の仕事にまで手を出していたのだから、ホワイต์がソ連の政策を米国で実行に移すことは簡単なことだった。同僚たちは誰一人として、彼がソ連のスパイだとは夢にも思わなかった。

コスターの此の著作の第一の強みは、FDR の側近にまで、共産主義がどんなに浸透していたか、また、ソ連のスパイであるホワイต์が、こういう状況の下で、どんなにやすやすと工作することができたかということ、いささかもためらうことなしに暴露していることである。共産主義が FDR の政府にどの程度まで浸透していたかを FDR が完全に掌握していたのか、あるいは知らなかったのかについては、主流の歴史学界ではまだ触れられていない。しかし、コスターは、「無意識に」「ホワイต์などの共産主義者の疑いのある者」たちを隠匿してやったと示唆している。そのために、「彼らが彼に追従し、敬意を払っている限りは、彼らのプライベートな、あるいは内密の政策に疑義を呈しようとはしなかった」。従来、ソ連の浸透ということを経口にすると、偏執狂的な反共主義者だとして無碍に斥けるのが歴史の主流の態度だった。しかしコスターのこの著作によって、また、米国陸軍の「NKVD（内務人民委員部）メッセージ」解読作業（ヴェノナ文書／米国のソ連暗号解読文書）によって、今では、ソ連がどの程度まで FDR 政権内部に浸透していたかは明らかになっている。もしソ連のスパイと共産主義者たちが FDR 政権に浸透していなかったら、世界はどんなふうになっていたかとなると茫然となるばかりである。

コスターは、「黒と白・善玉と悪玉」というような歴史観は避けるべきことを示している。彼が遭遇する次にあげるような神話に基づく歴史はさけるべきと。その例を本書から引用してみよう。

「天皇は臣民から絶対的に服従されており、臣民は彼を神と看做している」とされるのは米国の戦時プロパガンダによる捏造である。

パールハーバーで「日本軍は女性や子供に無法な機銃掃射を行った」と言われるが、コスターは、米軍への攻撃から外れた「付随的」な損害は極めて少なく、民間人の死者は 68 人、負傷者は 35 人に過ぎなかった、と述べている。

「近衛（文相首相）は平和主義者だったが、軍国主義者だった東条（英機大將／陸軍大臣）に押しのけられてしまった」というのは、米国が日本の歴史を「作り直し」た一例である。

「パターン死の行進」は組織的計画的な虐殺ではなかった。「米国人の死者数は5200と報告されている」が、実際の死者数は600～650である。

同時に、コスターの此の著作の中では、多数の奇妙な告発に言及している。たとえば、日本軍は、朝鮮で、「群衆管理の一形態としてのレイプ」のための雇用をしたなどという残虐行為の申し立てである。そのような申し立てを真に受けることは難しい。朝鮮の中では朝鮮人の方が日本人よりもはるかに数が多かったのであり、そんなことがあれば、朝鮮の男性たちは必ずや暴動を起こしていたと思われるからである。コスターの要約によると、朝鮮の人々は、実は、日本による「技術的教育的な改革」および「学校、銀行、鉄道」の建設によって利益を受けていたのであり、こういう業績を、実態のない残虐行為と並べて語ることは、日本人に対する中傷であるとともに、朝鮮の人々を侮辱することにもなるであろう。韓国の歴代の大統領は、実は、日本が韓国を近代化してくれたと賞讃しているのである。韓国は歴史始まって以来、ほぼ一貫して中国の卑屈な属国だったのである。

日中戦争に関する考証では、コスターは全力を尽くして、いわゆる「南京事件」に反駁している。これは、日本軍が南京を占領した後、一九三七年十二月十三日に、中国人に対して、無差別の虐殺とレイプを行ったとされる事件である。本書は、六週間の間に、四万二千人の中国人が殺害され、数百件のレイプが行われ、加えて「掠奪」と「放火」があったと述べている。本書によれば、中国人の言うことを鵜呑みにする人々の主張する数字は、人によって様々だが、「三十万人の殺害と二万件のレイプ」乃至は「四十万人の殺害と八万件のレイプ」というのが相場であるから、対比してみるとその違いは大きい。中国国民党の情報省は、常習的に死者数を粉飾し、実際には存在しなかった戦闘が起ったと主張して、米国人の憤激を誘い、金を引き出そうとする(Bradley,2015)。(南京で報告された残虐行為の忌まわしさは、実は、当時の中国国民党の「いなどの軍勢」を見事に描き出しているのである。彼らは、捉えた相手は誰であれ拷問にかけ、女性捕虜をレイプし、村々を掠奪した(Bradley,2015)。コスターも同意見で、「それから中国人は死者数とレイプ件数を膨張させた。その目的は、米国の世論の同情を買うことだった」と言っている。南京占領の時に日本軍を指揮していたのは松井石根大将だったが、その裁判に於ては、松井大将は、中国側が提出した甚だしく誇張された数字に翻弄されることになった。虚偽の証言に基づいて、極東国際軍事裁判所は、松井を処刑したのである。

米国のメディアと聖職者たちは、中国国民党と連携して、いわゆる「南京大虐殺」を広めるために共謀した。コスターの此の著書は、ニューヨークタイムズ記者で、当時南京にいたフランク・ティルマン・ダーディンにも言及している。ダーディンの報告では、日本が南京を攻撃する前に、中国軍は、蒋介石大将と司令官唐生智大将が南京から逃げ出したと聞くとすぐにパニックに駆られて逃亡したということである。「まだ戦う気のある」中国軍は、逃げて行く仲間に銃口を向けた。生き残った中国軍は、軽火器と重火器を持って、安全地帯——外国人居留民が設置した非武装地帯——へ逃げた。(Campaign for the Truth of Nanking, 2013; Tanaka, 2000。ダーディンはさらに続けて、「中国人の女性た

ちは、日本の兵士に好きなように弄ばれ、米国人宣教師たちはその事件を個人的に知っている」と述べ、また「二万人」が「処刑」された、と書いている。しかし、彼は日本が南京を占領する二日前に他のジャーナリストたちと一緒に南京を去っているのだから、こんなことを目撃したとは考えられない。そればかりでなく、彼の記事を、十二月十五日にシカゴ・デイリーニューズのアーチボルド・スティールが書いた記事と比較すると、ダーディンはスティールの報告を盗用したのではないかという疑いが生じる。

現に、この二つの報告はいずれも、その一番大本の情報源は、中国国民党の顧問だったマイナー・シール・ベイツ師が外国人記者団に配布したメモだった（東中野修道「南京の真実」2008）。コスターによれば、ベイツは日本人からも中国人からも尊敬されていたとのことであるが、眉に唾つけて聞かなければなるまい。中国人は、コスターが南京での被害者数として挙げた数値は少なすぎると言うだろうし、日本人は彼の報告書は知る人ぞ知る国民党のスパイが捏造したものだとクレームを付けると思われるからである。

本書はもう一人、「南京大虐殺」の「目撃者」として、ジョン・ラーベを挙げている。コスターは、ラーベがナチス黨員だったと述べているが、触れていない重要なことが一つある。それは、彼が Siemens' Far East operations の会長だったという事実である（田中 2000）。一九三〇年代に、ドイツは国民党政府に軍事顧問を派遣し、シーメンス社などの会社を通じて武器を供与した（Campaign for the Truth of Nanking, 2013）。実は、ドイツの企業は、中国を膨大な市場と看做していたのである（Furuso, 2007）。ヒトラーはうわべは日本と同盟を結んでいたが、日本人を嫌っていて、「黄禍（yellow peril）」と呼んでいた（ブキャナン 2008）。ラーベは、日本人は、ナチス黨員の腕章を見ると、いつでも、「尻尾を振って走って来る」と言っている。日本人を心の底ではひどく侮蔑していたことがよく分かる（Furuso, 2007）。ひょっとすると、ラーベは日本人を憎んでいたのかも知れない。何しろ彼は、国民党と一連托生の関係になっていたのであり、その国民党は日本軍と遭遇するたびに、完膚なきまで敗北を喫していたのであるから。彼は日本軍の残虐行為を日記に留めているが、その動機が何だったにせよ、とうてい信を置くことはできない。実際、彼の日本軍残虐行為の報告は、伝聞証拠に基づいたものであり、自分の目で見たことを述べたのではなかったのだった。ラーベの日記は一九九八年に英語で出版され、ニューヨークタイムズがその書評を掲載しているが、これでさえ、彼の主張には信憑性が全くないと酷評している（Furuso, 2007）。それにもかかわらず、面白いのは、彼が残虐行為が行われたと主張する期間の前、およびその期間中の定期的な人口統計を提供していることである。その数値は一貫して二十万人であった。彼の最後の統計は一九三八年二月十日のものであるが、市の人口は二十五万へ増加している。コスターは、「南京安全区国際委員会」の会長を務めていたが、皮肉なことに、このグループの調査作業によって、大量殺人について彼が主張したことは、完全に否定されるのである。

コスターは、前述書の著者田中正明が、「南京大虐殺」が起ったということ自

体を真っ向から否認していると述べているが、さらに田中の指摘によると、蒋介石や毛沢東を含めた世界の指導者は、直接間接に「南京大虐殺」に関連して、誰一人として抗議の声を挙げなかったのである（田中 2000）。事実、毛沢東は一九三八年に一連の講演をしているが、その中で、日本がもっと徹底的に南京の国民党を壊滅させなかったことに不満を漏らしている（田中 2000）。英語で書かれた年鑑「チャイナ・イヤーズブック」は、上海に本社のあるノースチャイナ・デイリーニューズ・アンド・ヘラルド社が刊行したものであるが、これを見ると、一九三八年版でも一九三九年版でも、「南京大虐殺」には一言も触れていない（東中野 2005）。「南京大虐殺」が米国内のチャイナロビーを含めた世界中の反日派に潜在的な武器を与えるのと同じことになったのだが、そんなことは当時全く報じられなかったのだ。実は、一九三七年に起った最大の国際的な出来事は、日本が米国船パネー号を誤って撃沈したこと、および、その後、日本が米国に謝罪と損害賠償をしたことだった。

ホワイトがソ連のために日米戦争をけしかける役割を果たしたのであるならば、何故にそのことがもっとずっと早く、パブロフの著書が出版される前に報道されなかったのか、と不思議に思う人も本書の読者の中にはいるだろう。ホワイトの政府関係の書類はプリンストン大学に保管されている。そして、米国陸軍の諜報機関や FBI はホワイトがソ連のスパイだということを知っていた。面白いことに、バーンズ（1972）は、FDR 政権内への共産主義の浸透について書き残しているが、それにもかかわらず、それがパールハーバーの誘因となった可能性については過小評価をしている——コスターとは真っ向から対立する考え方である。こんな真相が隠れているのに、FRD ホワイトハウスへのソ連の浸透、あるいは、米国におけるソ連の様々な分野でのスパイ行為を指摘すると、通常は、「右翼の偏見」だとして弾劾されることになっており、それ以上の議論は不可能になるのである。このように、歴史というものは、バラ色のイメージで描かれ、黒と白の対立とされ、不愉快な事実が抹殺されるのである。コスターは誠に珍しい例外の書を書いたのだ。

## References

Barnes, H.E.

(1972) *Pearl Harbor after a Quarter of a Century*. NY, NY: Arno Press.

Bradley, J.

(2015) *The China Mirage: The Hidden History of American Disaster in Asia*. NY, NY: Little, Brown and Co.

Buchanan, P.J.

(2008) *Churchill, Hitler and the Unnecessary War*. NY, NY: Crown Books.

Campaign for the Truth of Nanking

(2013) *There Was a Battle of Nanking but there was no "Nanking Massacre,"*  
Tokyo: Society for the Dissemination of Historical Fact.

Furuso, K.

(2007) Hitler and the "Nanking Massacre" Exposed in Rabe's Diary. [English translation] *WILL*, December.

Higashinakano, S.

(2005) *The Nanking Massacre; Fact Versus Fiction*. Tokyo: Sekai Shuppan.

Higashinakano, S.

(2008) *Top-Secret Chinese Nationalist Documents Reveal the Truth about the Nanking Incident*. Tokyo: Society for the Dissemination of Historical Fact.

Robinson, G.

(2001) *By Order of the President: FDR and the Internment of Japanese Americans*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Tanaka, M.

(2000) *What Really Happened in Nanking?* Tokyo: Sekai Shuppan.

Toland, J.

(1982) *Infamy: Pearl Harbor and Its Aftermath*. Garden City, NJ; Double Day.